

(科目区分) 教科及び教科の指導法に関する科目 (中学校)  
(授業科目名) 彫刻 2

## カーヴィングによる木彫制作と抽象彫刻の基礎考察

美術教育 佐々木昌夫

### 1. 授業の概要

本授業は、中等教育コース美術教育専攻3年次生を主な対象とした選択科目であり、彫刻分野におけるカーヴィング技法と抽象形態についての基礎学習を、実技中心に行った。本年度の受講生は、中等教育コース美術教育専攻3年次生3名・4年次生(重複履修)1名の合計4名であった。

#### ・授業目的

カーヴィング技法による抽象彫刻制作をとおして、彫刻の基本要素である素材・空間・動勢・量感について理解する。

#### ・到達目標

- ① 抽象彫刻における素材・空間・動勢・量感について考察して、自身の彫刻観を構築する。
- ② カーヴィングの実践をとおして、基礎的な技術を習得するとともに、自身のイメージを超えた抽象形態を発見する。

#### ・関連するディプロマ・ポリシー

教育と教職に関する確かな知識と、得意とする分野・教科等についての専門的知識を修得している。(知識・理解)

教育活動に取り組むための十分な技能を身につけている。(技能)

#### ・授業方法、形態、内容の概要

本授業で学習するカーヴィング技法では、電動チェーンソー・木工グラインダー等の電動工具やノコギリ・ノミ・大型カッター等の切削工具を使用した。それらの危険性を伴う制作工具の特質を考慮して、その使用方法や作業に適した服装等についての安全指導を一貫して行った。

授業の初めに、断面が15×15(cm)の木材(杉の角材)から、電動チェーンソーを使用して一人につき長さ30cm分を素材として切り取らせた。その角材から、「ねじれる」というテーマのもとに、カーヴィングによって抽象彫刻を制作することについて説明した。(重複履修生のテーマは「ゆらめく」)今回は、カー

ヴィングによる彫刻制作に初めて取り組む受講生がほとんどであるので、デッサン(平面)から立体の彫刻を想定することが不慣れではないかと懸念された。よって、デッサンで作品プランを練るのではなく、紙粘土でマケットを制作することとした。紙粘土は簡単に形を変化させられるため、最初から立体による制作プランの試行錯誤が可能となった。次にマケットを観察して角材の6面に下描きをし、明らかに削ってもよいと判断される箇所から削らせた。以後、「マケットの観察」・「素材への下描き」・「素材を削る」という一連の作業を何度も反復することによって、抽象形態を制作させた。本授業では、頭の中のイメージの具現化ではなく、イメージを超えた作品の探究が目的であるため、ある程度制作が進展した時点で、マケットを見ることを止めるよう指示した。

第8回授業で中間合評会を実施し、お互いの作品を鑑賞させて討議を重ね、以後の制作の方向性を検討させた。最後の授業でも同様に合評会を実施し、制作の総括とともに彫刻観の整理と言語化を図った。

### 2. アンケート結果

最後の授業で、以下のような選択方式と自由記述方式のアンケートを実施した。本年度は、受講生4名の全員から回答を得られた。(自由記述の回答は、簡略化して掲載した。)

#### 【授業の難易度】

[簡単]0名 [やや簡単]0名  
[ちょうどよい]3名 [少し難しい]1名  
[難しい]0名

#### 【授業のスピード】

[遅い]0名 [やや遅い]0名  
[ちょうどよい]4名 [少し速い]0名  
[速い]0名

#### 【授業への関心】

[全く関心がない]0名 [あまり関心がない]0名  
[何とも言えない]0名 [関心がある]3名  
[大変関心がある]1名

### 【授業への満足度】

[不満]0名 [少し不満]0名 [普通]0名

[満足]3名 [大変満足]1名

### 【この授業で学んだと思うこと】

- ・制作工具の扱い方。
- ・角材から形を切り出すプロセス。
- ・根気強く制作する姿勢。
- ・物を立体的に考え、観察する力。
- ・視点について
- ・木の特性が実践の中で学べた。

### 【改善してほしい点、評価できる点】

- ・多様な制作工具が使用できること。
- ・立体を制作する活動の基本が学べたこと。
- ・どこから制作するかを指示してもらえたこと。
- ・年度によって、異なる課題を設定してもよいのではないか。
- ・特になし

### 【その他、授業の感想など】

- ・木が自分の理想の形になっていくので楽しかった。
- ・大変だったが、達成感があった。
- ・楽しかった（2名）

## 3. 総括

筆者の制作（研究）のテーマは、自己の思いどおりにはならない物質や他者の〈他性〉といかに向き合うか、ということである。本授業の到達目標②での自身のイメージを超えた抽象形態の発見は、筆者のこの制作テーマとつながっている。おそらく本授業において受講生は、木という物質の扱い難さを痛感したのではないかと推測される。しかしながら、イメージを実現するための自己の延長としての木（素材）ではなく、思いどおりにならない木の〈他性〉と向き合うことによって始めて、自分のイメージとは異なる形や要素の発見が可能となるのである。そのため、根気を必要とすることは当然であり、授業計画の段階では、一つの作品に長時間をかけて制作することへの受講生からの不満も危惧していた。ところがアンケート結果を見るかぎり、むしろほとんどの受講生は、一つの作品にじっくり時間をかけて取り組むことに、意義を見出していたのではないと思われる。

授業目的・到達目標については、概ね達成できたと考えられる。だが、到達目標①の自身の彫刻観の構築については、本来、完成ということとはあり得ないので、これからも継続

的に検討して深化することが課題であろう。また、危険を伴うという彫刻制作の性質から、さらなる制作工具の安全指導の強化と環境整備の充実が必須である。

一方、彫刻は制作実践のみではなく、その表現と創造につながるそれぞれの主体性が重要である。それが保障されるためには、受講生が能動的な好奇心を発揮することができ、その先に主体的な表現と創造の意欲が現れる契機としての、大学生活での自由時間の確保が最も基本であると考えられる。